

朱の滋藤の弓持て、七寸有ける馬に、金の瓔珞の馬甲かけ、靜に歩ませて打通られけるが、東照宮、信雄と共に出迎ひ給ふを見て、馬より下り、いかに貳心有と聞たり、いざ一太刀參らんと太刀の柄に手を懸らる、東照宮左右の人に向はせ給ひ、軍始に太刀に手を懸られ、門出の目出た、候と高らかに仰有ければ、秀吉何ともいはずして、又馬に打乗り通られけり。

〔甲子夜話七〕

佐嘉肥前

弘道館ノ學生

松平肥前守ノ學館

熊本肥後

時習館ニ往タルトキ

細川越中守ノ學館

弘道館ノ學生

曰フニハ、貴邦ニテハ越中フンドシハ、寡君禪ト云ヤト問ケレバ、時習館ノ學生即答フ、汝ノ邦ニ

ハ定テヒゼンガサヲ弊邑瘡ト云ナルベシト、イカニモ敏捷ナル佳對ナリ。

〔甲子夜話六十九〕

又近來市中ニ、一稱ノ藥賣アリテ、道ヲ行キナガラ、十八トウヂ五文ゴモント呼ビ、又シバシシ

テ奇妙ト呼ブ、是ハ丸藥ノ數十八ヲ、錢五文ニ換へ、其効驗アルヲ自賞シテ、奇妙ト云ナリ、卑賤ノ

輩多クコレヲ求テ服用スルニ、果シテ功アリ、故ニ今都下盛ニ流行ス、又近頃七月九日、沼津侯特

賜アリテ退出シ、ソノ老臣ノ隱居士方祐因俗ノ名ハ繼殿助、今剃髮ヲ召テ、今日格別ノ拜領物シタリ、如何ナ

ル物ヤ當テ、見ルベシト問フ、祐因頭ヲ傾ケ、良久ク思案シ答フルニハ、定メシトウヂ十二トウヂ八ハ御紋ナ

ラント、俟手ヲ拍テ曰、奇妙。

〔俚言集覽知〕

地口 口合をいふ

〔三養雜記一〕初午稻荷詣

地口○中略

江戸にて稻荷祭には、地口行燈をつらねともすならはしなり、この地口といふは、土地の口あひといふことにて、たとへば地張させる、地本繪冊子、地酒などの類、いづれもこの地といへるは、江戸をさしていふ詞なり、さてその行燈にかけるを繪地口とて、繪を專にして、まうづる人のあゆみながらよみてわかるをむねとするなり、豊芥藏喜の小冊に、地口須天寶鸚鵡盃、比言指南、地口春袋など、みな安永ごろの印本なり、その頃はやりしと見えたり、この地口にくさぐさのわかち